慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フォンターネの小説におけるパースペクティヴ:『シャッハ・フォン・ヴーテノー』解釈の試み
Sub Title	Perspektive im Roman Fontanes : Ein Versuch der Interpretation von "Schach von Wuthenow"
Author	筑和, 正格(Tsukuwa, Masanori)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1973
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.32, (1973. 2) ,p.52- 67
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00320001-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フォンターネの小説に於けるパースペクティヴ

――『シャッハ・フォン・ヴーテノー』解釈の試み ――

筑和正格

話したりしなければなりません。ただし、彼が決定を下したり、説教したり、賢者であったりすることだけは慎しむべきです。」事実 るこれらの見解の真意は次のようなところにあったのではあるまいか。「(小説の中で)著述者は著述者として多くのことを行なったり、 的なものにあって生まれなければならない落ち着きと心地良さを創り出しているのはまさにそれなのです」と語っている。一見矛盾す という説に異議を唱えて、「(イギリスの優れた作家に見られる)この人形使い自らの出現は私にとって非常に魅力あることですし、叙事 の手など見たがらないのである」と批判している。だが一八七七年に彼の長年にわたる文通相手であり、『嵐の前』、『マルク・ブランデ ンブルク周遊記』等の出版者でもあるヘルツにあてた書簡では、シュピールハーゲンの「語り手は小説の中に口をはさむべきではない」 八五五年にフォンターネは、フライタークの小説『借方と貸方』の書評の中で語り手の出しゃばりを指摘しながら「誰も人形使い

こうした態度は彼の小説の中に明瞭に表われているのである。

彼の小説の中では語り手を単純に作家自身と同一視することはできない。語り手はあくまでも物語の「語り手」に過ぎず、彼には作

これらの事実がフォンターネの特徴を形造っている。(4) 界の背後に身を隠しているようでいて、その実、用心深くかつ巧妙に自分の姿を現わしているのである。自らの言葉の実践を思わせる 時おり語り手の中に、 中の人物 れており、 語り手が後退し、 彼等はそれぞれの視点から人物、 事柄について解釈を加えたり、評価を下したりすることが許されてはいない。その役割はもっぱら作中の人物たちに委ねら また人物の言葉の中に作家自らの声を聞きつけることができる。つまり「人形使い」としての作家は全く作品世 複数の人物が前景に現われる彼の作品世界は「劇」的構造をもっていると言うことができる。 事柄を観察し、主として作品の大部分を占める会話の中で各々の解釈、 評価を明らかにす 読者はごく

ドゥルテラ』と同様、 の作品に現われて来るテーマが初めて扱われている。その意味からも円熟味を増した後期の社会小説を理解するためには避けて通れな ここではその特徴について『シャッハ・フォン・ヴーテノー』の作品構造の中で具体的に検討してみたい。この作品には、 フォンターネの歴史小説から社会小説への移行が見出され、 また個人が社会の壁に衝突するというその後再三彼 前作 **¬**ラ

い作品なのである。

プ

ロイセン軍の美しい青年将校が容貌に難のある娘と結婚する羽目に陥り、それを嫌って自殺するというこの作品のストーリーは、

係の内にシャッハの悲劇を盛り上げること以上の意味をも見出し得るのである。作家が七○年余も以前の時代を選んだということ、そ さらにこの小説が執筆されたのは、ビスマルクの下にプロイセン軍がナポレオンⅢ世のフランス軍を破って以来約一○年、軍国プロイ 対ナポレオン戦直前からイエーナ戦でのプロイセン軍壊滅までの時期を選んだということである(実際の事件は一八一五年に起きた)。 実話に基いている。そして注目に値することは、作家が作品の時代設定として一八○六年から一八○七年までの間、つまりイエーナでの してプロイセンの強大な時代に敢えてプロイセン没落の時代を描いていることは、外見上はあたかも古い時代へのノスタルジアである 「ソを中心に統一成ったドイツ帝国が全ヨーロッパに対しその絶対的隆盛を誇っていた時代であったことも考え合わせるならば、 単にシャッハ事件の背景に同様にカタストローフへと運命づけられたプロイセンの姿を浮かび上がらせ、両者の平行関 その

る。 観察される対象であると同時に、 の周囲に設置された多様な視点、 から主人公を眺め、 って登場人物それぞれの観点から主人公を際立たせる試みがなされている。つまりこの作品では語り手の一個の視点に代わって主人公 前作『ラドゥルテラ』では、 以下物語の展開に沿ってその構造についての考察を進めることにする。 その姿を徐々に明らかにするのだが、同時に主人公を語ることによって自らを曝け出してもいる。つまり主人公は 冒頭部分で語り手自らが主人公の性格規定を行なっているが、 その観察者の姿を映し出す鏡でもあるわけなのである。 言い換えれば主人公を取り巻く複数の人物が重要な役割を果たしているのである。 この作品にはそうした二重構造が見出され この作品ではその方法は避けられ、 彼等は様々な観点 代わ

象づけられるのは身振り豊かなビューローの姿である。 策について意見を交わしている。 彼の同僚アルヴェンスレーベン、そして反政府党員ビューロー、 つも「喋りまくっている」のであった。 語り手は控え目に、 語り手はその紹介に際して、 しかし適確に彼等を紹介し、 語り手によれば彼の話し方はまるで「演壇での講義」であり、 並びに彼の著作の出版者ザンダーである。 ビューローの性質の一面を少々イローニッシュに規定している。 後は各々が語るに任せている。 彼等は政府の対フランス政 読者がまっさきに印

時代的雰囲気、

物語は美貌の未亡人フォン・カレヨン夫人のサロン風景から始まる。すでに主要な登場人物たちは皆姿を現わし、

各々の性格を徐々に明らかにしてゆく。その場に集うのは夫人の娘ヴィクトヮール、主人公シャッハの属する連隊から

るシャ 居合わせる人々への挨拶から、 クトヮールの表情に喜びの色が浮かぶのを指摘し、 政治的、 主人公シャッハは彼等の会話の最中に登場する。 ハは自分の属するプロイセン軍の絶対的優秀さを確信する立場から、 社会的現状認識の相違、 彼とビューロー、 およびそれぞれの性格の一端が明らかにされる。「フリードリッヒ大王の軍隊」への信仰を固持す ザンダーとの間の隔たりをも知らせている。 彼がこの二人にとり好もしい人物であることを教える。 語り手は、 彼の来訪が告げられたとき、二人の婦人、 政府のナポレオンに対する妥協政策に不満の意を表明す 続く会話の中で、 すなわちカレヨン夫人とヴィ また、

会話を進めながら

るのであるが、 義者の対象が彷彿されている。また、語り手はシャッハの「控え目」な態度を教えるのに対し、 迫り来る滅亡を予知し得ずにいる盲目的プロイセン将校と、 諸外国の実情に明るく、 プロイセンの現状を適確に把握しているビューローは、 まさに彼等のそうした現状を憂い国家の危機を警告する反軍国主 ビューローについてはすでに冒頭で示 その政策は現実にふさわしいとして肯

した性質を適宜補足して、「高慢さ」や「場を独占したがる」傾向を指摘している。

クト繊細な神経が許さず、彼には人情味があり過ぎてそんな真似はできない」とも判断を下す。それに対し、夫人に心酔しており、 れやすい」という弱点をも看破する。それゆえに、彼は未亡人のカレヨン夫人とは結婚しないだろうし、まして顔にあばたのあるヴィ 僚アルヴェンスレーベンはシャッハの「美的なもの」を崇拝するという面を語り、「病的なほど他人の判断、 ヮールとは関連を持ちたがらないだろう、とこの同僚は推察し、「彼女を無視したり、単なる灰かぶり姫として扱うことはシャッハの ・ラスの肩に担われた世界よりも、プロイセン軍の担うプロイセン国家の方が危げない』という信条をしか持たないプロイセン的偏狭 クトゥー 次の場面では、 ルの容貌上の欠点など意に介さないビューローは、他の観点からシャッハを「杓子定木な人間、勿体ぶった男、 シャッハの同僚、彼の対立人物たちが各々の観点からその場に居合わせないシャッハに対する評価を下している。 特に同僚の判断に左右さ 加えて ヴ 同

という同僚からの弁護がなされている。 このように遠近様々の距離、多様な視点の下でシャッハ像は色々に変化する。そして各々のシャッハ評は妥当性を含みつつも、 それ

の権化」であると批判する。 だがそれに対しても「彼は仲間の内で最も善良な人間」であり、「彼に於ける一切は純粋なもの」である

の同僚には、 ぞれの個人的限界の故に一つとしてシャッハという人物の総体を包含し得ないのである。つまり、 ビューローのごとき「プロイセン的偏狭の権化」というシャッハ評が不可能であり、 日常のシャッハを近距離から観察し プロイセンの現状を認識し得ない彼

彼等とは立場を異にするもう一人のシャッハ観察者ヴィクトヮールは、 女友達への書簡の中でシャッハ等とともに遠乗りをしたさい 得ないビューローは同僚と同一の観点から評価を下すことはできないのである。

のことに触れ、 シャッハに対する彼女の見解、 心情を告白する。 彼女はシャッハには何やらいかめしいところがあり、それが意見の相

設置されているわけではなかろうか。つまり、複数の視点の設置は、 うに各々一個だけでは主人公全体への「展望(Perspektive)」は開けてこない。だが実はそのゆえにこそ主人公に向けて複数の視点が ける彼女と彼等の観点の近似性とともに、人物たちの配置の中での彼女の位置をも推測し得るのである。 対する見解と、 ここでは彼女の、 だ姿を人々の視線に曝すことを恐れたのだと解し、 彼女には何の許しも請わずにふたたび夫人と腕を組み、 散策したさい、シャッハはカレヨン夫人と腕を組んだ。 ているのである。 主人公の姿が最初から明確にはされていないということは、 である。語り手が作品世界に於ける絶対的判断者としての立場を放棄し、複数の人物たちのパースペクティヴがそのまま提示されてい に寄せる思慕の念を明確に読み取ることができる。彼女の心情のシャッハへの傾斜はすでに遠乗りの場面でも推察できるのであるが、 ていることを明らかにする。そして彼の「実直な人間の平均的な分別」を「最高の分別」であると評し、 ヤッハ評と、 このように主人公を眺める登場人物たちの視点はそれぞれの主観的限界を持っており、 同僚の「美的なものを信奉し、他人の判断を気にする」という彼への見解とが重複し得ることを知り、 ビューローの「杓子定木、勿体ぶった」というそれとが、また「自分と一緒の姿を見られたくない」というシャッハに 読者自らが登場人物各人の見解を物語の進展の内に示される事実と照合しながら検討し、 非論理的なシャッハ形容の内に耐え難い想いが表出しているのである。さらに読者は、 つまり、 シャッハの方が優れているし、 この作品に於ける多様なパースペクティヴの設置は、 彼の虚栄心を非難する。だがそれにもかかわらず、彼女は彼を他の誰よりも重んじ 彼は「騎士的」であると述べる。 人々の集ら場所へと歩んで行ったのである。彼女はシャッハが自分と腕を組ん 帰り道、 もともと読者に主人公がはたして何者であるかを知る興味を呼び起こさせ 彼はヴィクトヮールの腕をとったのだが、 登場人物各々の主観的限界を突き破る手段として把握され得るの 読者にその世界への興味を喚起させ、主体的参加を促 読者はこの手紙から、 さながら「小さな望遠鏡 (Perspektiv)」のよ 彼女の「いかめしさ」という 如何にビューローがシャッハ 総合せざるを得ない。 ヴィクトヮールのシャッハ 村の入口までやって来ると それらの点に於

すという効果をも生み出しているわけである。

違以上にビューローの気を悪くさせている点ではないかと推測し、

次いで自分の心を痛めた出来事を報告する。彼等が村から教会まで

貌」の背後にあるものである、というのが王子の主張である。この王子の説は、それ自体としては「美」の定義づけの一つであり、 重要なのであり、 美などは些細なもので、より高次の美は「内面的なもの」に根ざすのだと説く。つまり内面的なもの――活力、 ことを教える。それに対し王子は「それでは一体美とは何なのか」という問いを設定し、 子は「遊蕩児」の雰囲気を漂わせながら、かつての美しい少女ヴィクトヮールの消息を訊ねる。彼の言葉の調子はシャッハにとり快いも のではなかったが、彼は王子に、ヴィクトヮールが天然痘に罹り、 王子のもとにシャッハ、ビューロー等が会し、社交的会話を進めているさい、たまたまカレヨン家の婦人達が話題に上り、 ハがヴィクトヮールと抜差ならぬ関係に陥るには、 それは「煉獄の火」を経過するのに似た「精練過程」を経た後に表われる「天性」なのだし、 プロイセン王子の「悪魔の美貌 九死に一生を得たものの、 自らそれに答えてみせる。 (beauté du diable)」という言葉が与っ 今では昔日の美しさは失われてしまった 激情、 それこそが「悪魔の美 彼は人間の外面的 情熱、 心--が

が勝利を収めるとも解釈し得よう。以前に他の人物から示された「他人の判断に左右される」、「灰かぶり姫としてヴィクトゥー(5) るということははなはだ暗示的である。また見方によってはここで「内面の美」と「外面の美」が逆転し、 ある。パースペクティヴの相対性が支配するこの作品内で、それに反する「絶対的美」に支配された瞬間が主人公没落への転回点にな と同じ「美」の定義を繰り返してしまう。 然ヴィクトヮールと二人きりになったとき、彼女のまなざしの中に「燃え上がる激情」を認め、ふと「王子が彼女について語ったこと」 れなりの妥当性を含んではいよう。だが彼を深く尊敬するシャッハの観点からさえ「英雄にして遊蕩の王子」、また「主義を持たない」 を思い出すのである。彼は、ヴィクトヮールが自嘲的に自らをミラボー(フランスの革命政治家、 人物という評価が下される彼の、この定義にはどれほど真意が含まれているかは疑問なのであるし、それ以上にこの定義はあくまでも 一つの定義であって、唯一絶対の妥当性をもつものではない。 輝かしく照らすということなのです」。この瞬間、 「形や色は問題ではありません。 王子の語った「美」の定義がシャッハの中で絶対的価値をもってしまったので しかるに「病的なほど、 絶対の価値をもつのは永遠に唯一つのこと、 他人の判断に左右されやすい」シャッハは、 隗男である) にたとえたとき、 以後は徐々に「内面の美」 魂が外面を創

57

視するには人情味があり過ぎる」という見解の妥当性がこの個所に窺われる。

らはそれを全く期待することが出来ない。そしてこれ以後のフォンターネの小説の中にもヒーローの姿は見当らない。 英雄、反主人公)」たちなのである。 々にして、シャッハのように自己の目標に向かうための確固たる意志にも行動にも欠け、 の中に古典的意味での「ヒロイン(女主人公)」に一脈通じる面を見出し得るのだが、このマリオネットのような人物であるシャッハか 周囲の思惑に依存する「アンチヒーロ

【の判断への従属性という点に関して、シャッハは『ラドゥルテラ』の女主人公メラーニエとは好対照をなしている。

読者は彼女

しさ」にうたれたかに見えるシャッハではあるが、所詮王子の見解と彼のそれとの一致は束の間のものでしかあり得なかった。 シャッハのアンチヒーローぶりはヴィクトヮールとの間の一件の後、 彼の態度から如実に示される。 一時はヴィクトゥ その日

さしさわりのない話題なしには、 たからであろう。 美」を注目していた。カレヨン夫人のサロンに出入りしていたのも、夫人の人柄、知性とともに、彼女の美貌が彼に大きく作用してい 彼女の家を立ち去るとき、すでに彼は彼女との行為が「罪」であることを独白している。「美男」である彼は、他人に対しても「外面の の中で眺める。彼についての「好意的判断」が正しいのか、かつて遠乗りのさいに抱いた「邪推」が正しかったのか、彼女はその選択 夫人に魅かれていたものと考えられる。ヴィクトヮールとの関係を「過失」であると意識する彼は、努めて彼女から遠ざかろうとし、 冒頭においても、 カレヨン家を訪れることがない。 次章のシャッハ不在の場においても推察されていたごとく、彼はもちろんヴィクトヮールではなく、 力、 募る想いのヴィクトヮールは彼のそうした態度を期待と不安

58

ターを「嘲笑と大燥ぎ」の材料にしようとする。「近頃、 はビューローのプロイセン軍批判の正当性を知らされるのである。 二人の間の秘密は、 シャッハの同僚の馬鹿げた仮装行列の結果、 以前ほどの高位にはない自分達の連隊は、 彼等は当時上演されたルター劇を「もっぱら滑稽面から眺め」、ル 思わぬところで明るみに出てしまう。 再び『自らの姿』を示すという一 この馬鹿騒ぎの顚末で、

に迷うのであった

る 種の愛国的義務を負っている」と彼等は主張するのだが、 という事実からは作家の諷刺、 並びに批判の意を容易に斟酌し得る。彼等がその計画を練るさい、シャッハを快く思わない一人の その彼等の姿、 「エリート連隊」の姿が空虚で馬鹿げた喧噪を通じて現われ

者は、彼を語ることによって自らを曝け出すこととなる。 とが感じ取れる。それゆえ、この同僚のシャッハ評は、その一面性、 ッハの虚栄心のみに根拠づけて下した判断は、 で指摘されるのだし、この計画の場に届けられるシャッハの手紙の中にも、 同僚が彼の「虚栄心」に触れる。 ャッハについて何等判断を示さないにもかかわらず、 シャッハが 必ずしも読者の反感を 買う 人物として 描かれているわけではないこ だがヴィクトヮールはもちろん、夫人も彼の虚栄心のみを指摘し、そこからのみ彼を判断してはいないように、 この場面全体を貫く語り手の連隊の将校に対するイローニッシュな態度に密接に結び付いてるのである。ここでもシャッハ観察 この「虚栄心」は、 シャッハに好意的な同僚によってすぐさま覆されてしまう。その点からも、 以前にはヴィククトヮールの手紙の中で、 皮相性から、読者をして評者自身へ疑いの目を向けさせるもので 見方によっては彼の虚栄心の現われと解され得る個所があ 後にはカレヨン夫人のシャッ 同僚の一人がシャ 語り手がシ ハ評

ある。こうして、彼の内なる「正義感」と結婚を嫌う心理とが葛藤状態に陥る。そして一時は、厭わしくとも運命として、彼女への償 響されたとはいえ、彼の内奥ではそれに同意できずにいるのである。彼自身独白の中で、王子の言う「精練過程」には疑問を表明して 婚自体を嫌う彼の心理を推測し得よう。もちろんヴィクトヮールの容貌の問題もそれに加わる。 根」を買って、彼に「起こってしまったことの合法化」を求める。彼はそれを承諾するにはするのだが、内心それに逆らう衝動も感ず る。 は彼が「美男の例に洩れず、気が弱く虚栄心がある」ことを認めながらも、彼のもつ「並はずれた正義感と、 痛に耐え切れず、彼女はついに母親に秘密を 告白してしまう。 事実を知った夫人は さっそくシャッハに娘との結婚を要求する。 「自分は独身のままでいたいと望んでいた」という言葉や、後の彼の独白、作品の結末に示されたヴィクトゥールの見解から、 彼女と結婚することによる同僚の嘲笑、あるいは田舎での牧歌的生活は、 彼の想像の中では耐え難い苦痛をもたらすものなので 前述のごとく、 非のうちどころのない心 いかに王子の言葉に影 夫人

にして、彼女は彼等と同じ世界に関わっていた自分を改めて認識し、大きな失望感に襲われる。その失望感は自己嫌悪へと発展し、

59

彼等の騒々しい仮装行列はヴィクトヮールに多大な衝撃を与えた。まるで「地獄」を思わせるその喧噪の野卑な空虚さをまのあたり

いとして結婚しようという意志を固めかける。

ヴィクトヮールの足下に跪いており、その下には"Schach-matt"と記されている。シャッハの名前をチェスに洒落たこの戯画は、 カレヨン家のサロンに於いてチェスの勝負を終えたシャッハとヴィクトヮールの姿が描かれ、ペルシア風の帽子をかぶったシャッハは は主人公の名前を初めて耳にした時のチェスへの連想が、やはり作家自身によって意図されたものであったことを確認する。戯画には ハ、夫人、ヴィクトヮールをモデルにした戯画を彼のもとに送り、さらには白昼衆人の眼に曝すのである。この戯画の内容から、 だが彼の敵対者の嘲笑は想像以上に彼の心を傷つけることになる。彼等はシャッハとカレヨン家の婦人達の関係を嗅ぎつけ、 シャッ

側から鍵をかけた、ということは、彼に自分の陥った「出口無し」の状態を想起させたのかもしれない。だがもしそうだとしても、(8) 然の状態に陥っているのである。彼の思う、残された唯一の方法が何であるかは明白である。それゆえ、美しくも、もの悲しい湖上の いる彼は、実はもはや社会の環から脱落した人間なのである。つまり彼は社会不適合者なのであり、すでに matt の状態、死んだも同 この言葉は読者には大層皮肉な響きをもつ。自ら脱け出す意志ももたず、かといって制約を負うこともできず、抵抗する力にも欠けて 約は負いたがらないという社会の環を想起させるのである。 ついに彼はこうつぶやく。「脱け出られたら("Könnt' ich heraus!")。」 の木の周囲を歩き回る彼は知らず識らず環を描いているのだが、その環は彼に別の環、彼がその中で生きたいと望みながらそのための制 はそれも彼の主観に過ぎないのである。なぜならば、実際は群がる蛾に眠りを妨げられ彼は窓から戸外へ出るからなのである。オーク 自分の置かれた状況を再考し、事態の解決法はもはや唯一つしかないことを知る。城の中の、彼が一夜の寝所に定めた部屋に下男が外 であるが、そのさいにも語り手は単なる傍観者、報告者としての立場を超えないように努めているようである。シャッハは孤独の中で 家と取り決めた婚約の儀を果たすことなく、故郷のヴーテノーへと逃避する。 はや「王手詰め」の状態に陥った彼の姿を比喩的に描き出しているのである。こうした攻撃にはなはだしく傷付けられ、彼はカレヨン ヴーテノーにおけるシャッハ一人のシーンでは、語り手がこれまでの観察者であった他の登場人物達に代わって彼に視線を向けるの 実

60

ャッハはさらに、一連の祖先の肖像画の前で自分の望みを改めて自覚する。 彼の思考の中では (実際にもそうであったかもしれな

彼のために奏でられるレクイエムと解されるのである。

罪なのである。 やすいのではあるが、実は彼女の性質自体も「罪」を生み出す原因であった、と考えられるのであり、その点では彼女もシャッハと同 る気持を諌めながら、ひっそりと生きるヴィクトヮールの姿が対照的に際立ってくる。かつての手紙の「自分のような立場にあれば、 とえに彼が自らの「正義感」に従うことを要求しているのである。だがこのように夫人の言動が積極的であればあるほど、 れている。シャッハはヴィクトヮールの心情を深く思いやることなく、ひたすら結婚を嫌うのに対し、 会的立場をも犠牲にしようとは思わない」とも語る。ここにはシャッハの利己的な立場とカレヨン夫人のエゴイズムの相剋状態が示さ に従う、そういう風に教育されている」と告白し「たった一人の愛する娘の、犠牲になろうというとっぴな考え方のために、 彼女の社交界での生命が絶たれることへの恐れも多分にあったと考えられる。夫人は「社会に属していて、 結婚を望むのは、ヴィクトヮールへの同情もさることながら、彼と娘との一件がスキャンダルとなり、「カレヨン家の家名」が汚され、 夫人は彼が受けた恥辱を毫も知らずにおり、彼の「背信、違約」を非常に腹立たしく思っていたのであった。 規定しているのは、 う観点からの問題が示される。またこれまでの彼の言動から、ヴィクトゥールのことを無視できないまでも、 耐え難いものであった。こうしてシャッハの立身出世志向、それゆえの平凡な日常生活嫌悪、 れらの中に加えられた様子を想像する――「将軍達の間に騎兵大尉が」、「美しい婦人達の間にヴィクトヮールが」――その光景は彼には とごとく大佐、将軍位にまで達している。 人は寛大さや、自らを慰めること、自らを許すことを学ぶのです」という言葉通りに見える彼女の態度は、 カレヨン夫人の願いを容れた国王はシャッハを呼び出し、 カレヨン夫人はシャッハへの要求が果たされないことに業を煮やし、ついに国王に申し出て娘との結婚を彼に命令することを乞う。 所詮は自己中心的なナルシシズムである、ということも明確になるのである。 加えて肖像画の婦人達は皆美しい女性なのである。彼は自分とヴィクトヮールの肖像画がそ 次のように命令する。 「私は公正さを要求する。そしてこの公正さのゆえ そして再度ヴィクトヮールの容貌、 夫人は彼の真情など認めず、 たしかに読者の同情を誘い その制約を果たし、 彼女が娘とシャッハとの シャッハの行動、 母親のはや 自分の社 その掟 心理を とい ひ

61

いが)、

結婚は自分の出世を妨げるものであった。結婚すれば彼は現在の地位、

騎兵大尉に留まることになる。

しかるに彼の先祖はこ

彼は、結婚式を挙げることによって「服従」の命令を実行し、しかる後に自殺することで「不服従」という内なる要求、 死を決意したシャッハと、一抹の不安を感じながらも彼の話に聞き入るヴィクトヮールの姿から、読者は痛々しささえ感じ取る。 とが話題に上る時だけ、常の彼には珍しい「空想」を働かせて語り、旅行の目的地「神秘的な暗黒大陸」についても説明する。すでに ヨン家と和解し、ヴィクトヮールとの結婚式の期日も正式に定める。 だが彼女のもとでの会話では、 彼は口数少なく、「式以後」のこ 決心が確固となるにつれ、今までの自分の「人生」への要求を断念するにつれ、皮肉にも彼には以前の安らぎが戻って来る。彼はカレ 対命令と「不服従」という自らの要求を満たす手段、あの「ヴーテノーですでに抱いた考え」を実行に移さざるを得なくなってしまう。 に王に対する「服従」が加えられたのである。 だがそれすらも彼の 内奥の声を 屈服させ 得なかった。 こうして彼は「服従」という絶 義務と名誉が要求するものを思い出して下さい」と彼に言う。シャッハはまさしく進退極まってしまうのである。彼自身の「正義感」 貴君がフォン・カレヨン嬢と結婚することを要求する。 さもなくば、 貴君は職を辞すべきことになろう」。また王妃も「あなたの 妄想から生ま

現象』であり「地域の制限」を伴なっているのだと説く。つまりこの「全く異常な原因を持つ事件」は「プロイセン王の首都」 解釈が示されている。 対する同僚の嘲笑を不名誉なものとして恐れ、自然の帰結とも言うべき彼女との結婚から逃避したと解し、こうした出来事は「時代の 作品の結末には、言わばそれまでの登場人物各人のパースペクティヴを代表した形で、ビューローとヴィクトワールのシャッハ事件 シャッハの対立者ビューローは、 シャッハの美男ぶりを皮肉に形容しながら、 その彼はヴィクトヮー

ヒ大王の軍隊の末裔」に於いてのみ、「名誉の代わりに自惚れを、

魂の代わりに、 すぐに止まってしまうゼンマイ装置をし

ることであった。生きることに優柔不断であった彼が、皮肉なことに死ぬときだけは決断を下し、勇気をもって行動するのである。 れたエゴ中心の要求を満たすのである。この結婚式、死はそれまで逃避に終始していた彼がなし得た唯一の行動らしい行動、決意を要す

62

ヴィクトヮールの書簡がビューローのそれと並んで置かれていることの意味があろう。 う。だが作家の意図はそこに留まっているわけではない。前述のごとく、いかに視野の広い、知性に富む人物ではあっても**、** を広範な関連の中で鳥瞰すれば、ビューローの主張する事実は認められようし、その事実を読者に教示することは作家の意図でもあろ は判断する。 された社会の判断」に従属させるのであり、シャッハもこの「虚栄と偏狭以外の何物でもない偽りの名誉崇拝」に屈服したのだ、と彼 名誉」が作用しているのを認める。そして、この「偽りの名誉」こそは人を「存在するかぎりの最も不安定なもの、 か持たない軍隊」においてのみ起こり得るのだと彼は主張するのである。彼はシャッハ自身、シャッハ事件の中に形骸化した「偽りの ハ事件が、ヴィクトヮールの容貌に関する嘲笑、それへの恐れ等から、時代、社会の奇形的側面にまで結び付いている。たしかに事件 には一登場人物としての限界があるのである。それゆえ、作家はビューローとは異なった観点からの解釈をも必要とする。その点に 「個々の事から全体を、 全体から個々の事を推論する傾向」があると自認するごとく、ビューローの見解の中ではシャッ 流れる砂上に構築

のごとくシャッハ事件をあまりにも普遍化し過ぎているという難点をもつと同様、 して彼女の主張するシャッハの「結婚不適性」は、物語の中にその妥当性を見出すことが出来る。だが、ビューローの説が自らの言明 状況に重点を置きながら事件を解釈するビューローとは対照的に、彼女はシャッハ自身の内面的諸要素に重きを置いて判断を下す。そ たと述べる。その彼にとっては、彼女との結婚で自分の目指す偉大な人生が挫折するような気がしたのだと彼女は解している。 サークルの中で輝き、そこを支配する」能力はあり、 まるで「ある王子の 宮廷での英雄」として 彼は 定められているかのようであっ に留意する人間」であり、「精神的に優れてもいなければ、卓越した人格の持ち主でもない」と彼女は認めながらも、少なくとも「狭い であったと解釈する。つまり彼女は、シャッハが結婚には「適していない」人間であると主張しているのである。彼は「外面的なこと を選ぶほど軟弱ではなかったと彼を弁護し、彼に大きく作用していたのは結婚により自分の理想とする生き方が妨げられるという意識 彼女はもっぱらシャッハ個人に視点を固定して見解を述べる。彼女はまず、シャッハは彼女の容貌についての同僚の嘲笑に屈して死 ヴィクトヮールにも、 シャッハに重くのしかかって

63

いた彼女の容貌については多くを語りたがらず、逆に自分の愛した男、ひいては自分の彼への愛自体を庇う気持から、

世間の嘲笑に耐

最終的判断は読者の手に委ねられた形でこの小説は終わっている。

これまで検討を加えたごとく、シャッハ自身、

また彼の行動については、

彼の同僚、

ピューロー、

ヴィクトヮール等の登場人物それ

主観の領域内に留まっているのである。このようにシャッハ自身、シャッハ事件について主観的限界をもつ人物たちの見解を紹介し、

彼女とシャッハとの間に出来た子供は明らかにシャッハの面影を宿しているのである。彼女はつねにシャッハの面影を身近に感じ続け

「仮象」の世界から自由になったのだろうか。その答えは彼女の子供を通じて暗示されているように思われる。彼女の子供、

さらに、一見彼女は「仮象」の世界から解放され、「幸福」を享受しているようだが、

諦念をもってしか「愛」を獲得 そもそも「人生で最も素晴しい

はたして真

彼女が自分の

ることを余儀なくされているわけなのである。シャッハの抱いた「偉大な人生」の観念を笑止なものとして斥けながらも、

できないという皮肉が見出される。

もの――愛」を得ることなど「とうに諦めていた」彼女がそれを得たのである。そこにはまたしても、

「幸福」を口にしていることにも注目してみたい。つまり彼女は「愛」――「子供」を得たのである。

の手紙は、イエーナ戦後、つまりシャッハを滅亡させた、ビューローの語る「仮象」の世界が崩壊した後のものであり、

え得る男としてのシャッハを語るというきらいがある。まさにシャッハが鏡になって両者の姿を映し出しているのである。

物たち各々の評価、 にもかかわらず、 ぞれの観点から様々な判断が下されてはいるが、それらのどれ一つとして完璧なものはない。彼等はそれぞれ限界をもっている。 の従属性、」「人情味」、「善良性」、「虚栄心」等の諸要素は、それら一つだけではシャッハ自身、 のである。シャッハの死という事実を眼前にしながら、 作中人物のシャッハに対する見解の内で、 解釈は、 物語の展開の中でそれぞれの妥当性が示されているのである。 ビューローもヴィクトヮールも彼の心の中には立入れないのである。 事件の全貌を明らかにすることはでき

ろんシャッハにも、そして語り手にさえも限界がある。つまりこの作品世界には、一切を見通し絶対的に妥当な判断を下す者はいない 全く的を外れていると見做し得るものもない。すなわち、既述のごとく人 彼等の指摘する「美崇拝」、「周囲の判断 だがそれ

の相対性を作品世界に反映させ、読者に作品世界の信憑性を確信させることを試みているのである。 相対性のゆえに現実世界に適合している。つまり作家は、複数のパースペクティヴをその複数性のまま描き出すことにより、 がなく、限界を持つ人物たちが互いに互いを判断し合うことによって相互にそれぞれの姿を映し合う、この作品世界もそこを支配する うに思える。また各人の判断が多分に一面的であり、完璧であり得ないのは、現実の人間の判断と共通するわけであり、また「絶対」 ら具体化し、多彩な層を示しつつ、相補い合うことによって個々の限界を突破し、立体的に全体像を作り上げる機能を果たしているよ る限界性と妥当性なのであり、それゆえに人物たちの多様な見解はシャッハという一個人、彼の事件という一つの事柄を各々の側面 それらのどれ一つが欠けても彼の言動の理解は不十分なものになる。作家が示すものはまさにそうした個々人の見解に見られ 現実世界

作家が直接受ける恐れがあるのにひきかえ、語り手が中立的立場を保ちながら作家の見解を登場人物のそれとして提示するさいには、 ことができるのである。なぜならば、作家イコール語り手として作中の人物、事柄に対する自らの判断を示す場合には、 ヴを包含し、より大きな展望の下で作品世界を見渡しているように見える作家自身が、登場人物の姿を借り、自らの見解を腹蔵なく示す て実践していることを知る。既述のごとく、この作品では語り手は狂言回しに過ぎないのである。彼は単なる観察者、報告者に留まり、 等の中に作家の声を聞きつけることができ、それゆえ作家が彼の抱く作家、語り手の作品世界に対する態度観を、 いかなる判定をも下すことはない。だがそうした語り手の限界性、中立性のゆえにこそ、一見語り手、作中人物たちのパースペクティ 実際の創作にさいし 読者の反論を

65

また読者は、ビューローの政治、社会的見解の中に、あるいはシャッハの抱く「偉大な人生」観に投げかけるヴィクトヮールの疑問

たしているのである。 必然的に読者の反論は発言者である人物自身に向けられるからである。つまり人物たちは一面では作家自身の隠れ蓑としての役割も果

うことを

意味するものでもない。 語り手が人物達との間に常に距離を置いているということは、 主人公シャッハに対する作家の態度を例にとると、 作家自身が終始冷やかな態度で作品世界、 彼は確かにシャッハの政治的現状認識、 作中人物を眺めているとい 人生の理

想像についてはビューロー、 ヴィクトヮールの発言を通じて批判の目を向けるのではあるが、ヴーテノーでのシーンで感じ取れるよう

の同情を寄せているのである。その点にしばしばフモールと名付けられる「隔たりと同情」の二面性というフォンターネの特徴の一つ 一面ではその弱さのゆえに「仮象」の世界の犠牲者とならざるを得なくなった彼に、むろん用心深く、控え目にではあるが、

が見出される

すなわち、多様な主観的パースペクティヴの下に浮かび上がる像はたしかに具体的とは呼び得ようが、一体それを客観と呼び得るのか 体的であり、躍然と把握できるということを教えるこの作品には、フォンターネの基本的特徴が遺憾なく示されており、それらは後期 どうか、作家は主観の集積による客観への到達が可能であると意識していたのかどうかという問題について、この作品だけを解答の拠 にすることは早計に過ぎるのである。だがそれゆえにこの問題はフォンターネのこれ以後の作品検討のさいの指針になることと思われ に到るにつれ、より洗練されてゆくのである。それにしても主観の集積がはたして客観となり得るかという問題がまだ残されている。 人間の判断に従うかぎり、現実は多義的、相対的であらざるを得ないが、しかし逆に多義的であるかぎり、人間にとっては現実は具

Theodor Fontane: Sämtliche Werke, Abteilung 1. Bd. 1. C. Hanser Verlag, München 1962

る。

- 1 Theodor Fontane: Sämtliche gesellschaft, Darmstadt 1969 Werke, Bd. 1, Aufsätze, Kritiken, Erinnerungen, S. 302. Wissenschaftliche Buch-
- 2 Brief an Wilhelm Hertz, 14. Januar 1879, ebd. S.
- Brief an Friedrich Spielhagen, 24. November 1896, ebd

3

4 Kenneth Attwood: Fontane und das Preußentum, S. 20. Ronald Schweizer: Thomas Mann und Theodor Fontane, S. 90. Haude & Spener Verlagsbuchhandlung, Berlin 1970 Juris Druck+Verlag, Zürich 1971

両者はフォンターネの根本的特徴がフモールであると指摘している。

- 5 Hans-Heinrich Reuter: Fontane. Bd. 2, S. 608. Verlag der Nation, Berlin 1968.
- 6 Brief an Emile Fontane, 19. Juli 1882, Fontane Briefe Bd. 2. S. 65. Aufbau Verlag, Berlin und Weimar 1968
- 7 Schah あるいは Schach はペルシァ王の尊称でもある。
- 8 Peter Demetz: Formen des Realismus Theodor Fontane S. 160. C. Hanser Verlag, München 1964.
- 9 R. Schweizer: ebd.